

Invited Article

視線触発は発達過程において第一次的か

森有哉（東京大学医学部）

Abstract

本論文の目的は自閉症に関する研究所や当事者の手記などの分析を通じて、自閉症を持つ人の経験構造のあり方を明らかにすることである。自閉症者の経験構造を明らかにすることは、自閉症者の療育に生かされるだけでなく、定型発達者においては日常的すぎて見過ごされてしまう経験を支える構造も明らかにすることができる。本論文では、まず初めに自閉症の一般的な定義や歴史を確認した。その上で村上靖彦『自閉症の現象学』における議論を概観し、自閉症を説明する上で重要な三つの概念、視線触発、図式化、現実の次元化について紹介した。さらに、綾屋紗月が『発達障害当事者研究-ゆっくりしていねいになりたい』において記述した現象をもとに図式化概念を再考した。また発達過程において視線触発が第一次的か否かに関して、村上靖彦、内海健と熊谷晋一郎、國分功一郎の異なる立場を取り上げた上で、村上・内海の視線触発の欠如が第一次的であるとする考え方がより説得力を持つとした。最後に、熊谷・國分の主張から導かれる重要な点として、コミュニケーションの困難の所在には二つのヴァリエーションがあるということを指摘した。

キーワード：自閉症, 発達障害, 視線触発, 図式化

The purpose of this paper is to clarify the nature of the experience structure of people with autism through analysis of studies related to autism and memoirs of those involved. Illustrating the structure of experiences of people with autism will not only be a useful perspective in medical treatment and education of people with autism, but will also reveal the structures that support experiences that are too routine and overlooked by people with typical development. In this paper, we first review the general definition and history of autism. Next, we review the discussion in Yasuhiko Murakami's *The Phenomenology of Autism* and introduce three important concepts in explaining autism: affection of contact, diagrammatization, and dimensionalization of reality. We then reconsider the concept of diagrammatization based on the phenomenon described by Satsuki Ayaya in *Tohjisha-Kenkyu[sufferer's first-person study] of Developmental Disabilities: We want to connect with others slowly and carefully*. In addition, we discuss different positions of Yasuhiko Murakami and Takeshi Utsumi, and Shinichiro Kumagai and Koichiro Kokubun regarding whether or not affection of contact is primary in the developmental process, and argue that Murakami and Utsumi's view that regards the lack of affection of contact as primary is more convincing. Finally, we present an important point derived from Kumagai and Kokubun's argument that there are two variants in the location of communication difficulties.

Keywords: autism, developmental disabilities affection of contact, diagrammatization

1. はじめに

本論文は自閉症を持つ人の経験構造を明らかにすることを目的としている。研究方法としては客観的なデータを用いることなく、自閉症に関する研究所や当事者の手記などの分析を通じて、データ化し得ない経験構造のあり方それ自体を明らかにすることを試みた。自閉症の経験構造を記述することは、自閉症を持つ人の療育に生かされるだけでない。定型発達者が“定型”とされる社会において、多くの困難を抱える自閉症の人々の経験構造を明らかにすることは、普段の日常では特に困難を抱えることなく過ごすことができってしまう定型発達者にとって、その経験を支え、常に働いているが、それ故に常に見過ごされてしまう経験の枠組みを明らかにすることができる。それは『存在と時間』においてハイデガーが、道具をうまく使えない場面を分析することで、普段問題なく道具を用いることができている際に暗々裏に働いている目的的な指示の連関を明らかにした¹ことと繋がる。もちろん、自閉症を持つ人と道具の使用とが全く同じであると言っているわけではない。ある意味で定型発達者により構成される社会において“うまくいかない”自閉症の困難の所在を探ることは、普段、定型発達においては何事もなく通り過ぎてしまう経験のその成り立ちに光を当てる契機となるということである。そのようにして定型発達者、自閉症者の経験構造が明らかにされることは、その両者を相対化することにも繋がるだろう。

本論文の流れとしては、まず初めに自閉症の一般的な定義や歴史を確認し、その上で村上靖彦

『自閉症の現象学』における議論を概観し、自閉症を説明する上で重要な三つの概念、視線触発、図式化、現実の次元化について整理する。さらに、綾屋紗月が『発達障害当事者研究-ゆっくりしていねいにつながりたい』において記述した現象をもとに図式化概念を再考した。また発達の過程において視線触発が第一次的か否かに関して、村上靖彦、内海健と熊谷晋一郎、國分功一郎の異なる立場を取り上げた上で、それらを検討し、村上・内海の視線触発の欠如が第一次的であるとする考え方がより説得力を持つと示す。最後に、熊谷・國分の主張から導かれる重要な点として、コミュニケーションの困難の所在には二つのヴァリエーションがあるということを指摘する。

1. 自閉症の一般的な捉えられ方

1.1. 現在の DSM-5 における定義

自閉症はコミュニケーションや社会性の障害、および反復性・常同性が見られる精神障害とされている。現代の精神医学において最も影響力を持つ DSM-5 (米国精神医学会の定める『精神疾患の診断・統計マニュアル第5版』)において、「自閉スペクトラム症/自閉スペクトラム障害」の項目は「自閉スペクトラムの基本的特徴は、持続する相互的な社会コミュニケーションや対人相互反応の障害 (基準 A)、および限定された反復的な行動、興味、または活動の様式である (基準 B)。これらの症状は幼児期早期から認められ、日々の活動を制限するか障害する (基準 C と

¹ M. Heidegger, *Sein und Zeit*, Niemeyer, Tübingen, 19. Aufl., 2006, S.73 (ハイデガー『存在と時間』熊野純彦訳, 岩波書店, 2013, p.352)

D)」²と定義されている。

1.2. 自閉症の歴史

自閉症(autism/Autismus)という言葉は初めて用いたのは、統合失調症という言葉を作った精神科医オイゲン・ブローラーである。彼は統合失調症の中核的症狀の一つとして自らの中に閉じこもる「自閉」的傾向を取り上げたのだった³。現代的な「自閉症」の発見はレオ・カナーとハンス・アスペルガーによってなされた。カナーの「情動的交流の自閉的障害」⁴、アスペルガーの「小児期の自閉的精神病質」⁵という論文においては、現代において自閉症と呼ばれている子どもたちの症例が取り上げられ、報告されている。イギリスの自閉症研究者・児童精神科医であるローナ・ウィングが両者の論文を比較した上で両者の共通項を抽出した記述⁶をもとに、相川翼はカナーとアスペルガーの自閉症の状態像は「言語的・非言語的コミュニケーションの問題、社会的孤立、反復的な活

動パターン—どれを取っても、整理の仕方が異なるだけで、今日の自閉症の状態像とほとんど同じである」⁷と指摘している。また、カナーもアスペルガーも統合失調症との関係に言及していたように、初期には自閉症と統合失調症が連続的なのか別物なのか議論されていたが、次第にその両者が別物であるとの説が支持されるようになった。石原孝二は歴代のDSMにおいても「DSMの初版(1952)と第2版(1968)では自閉症/自閉症的という言葉は「統合失調症(的反應)小児期型」を特徴づける性質として記述されていたが、DSM-IIIでは自閉症は統合失調症と切り離され、「広汎性発達障害」のカテゴリーに含まれる障害として位置づけられることになった」⁸としている。また発達障害という区切り自体についても、「DSM-IIIからDSM-5にいたるまでの間で、発達障害の位置づけはより包括的で重要なものとなって」⁹いき、精神障害全体の基盤として「生物学的な基盤とも、心理的な基盤とも異なる基盤とし

² 米国精神医学会『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル』日本精神神経学会監修、高橋三郎・大野裕監訳、医学書院、2014、p.52

³ E. Bleuler, Die Prognose der Dementia praecox (Schizophreniegruppe), *Allgemeine Zeitschrift Für Psychiatrie Und Psychisch-Gerichtliche Medizin* 65, S.436-64 (ブローラー『早発性痴呆または精神分裂病群』飯田真・下坂幸三・保坂秀夫・安永浩訳、医学書院、1974、p.51-81)

⁴ L. Kanner, Autistic disturbances of affective contact, *Nervous Child* 2, 1943, p.217-250(カナー「情動的接触の自閉症障害」成瀬毅編訳『自閉症論資料集の試み—ハンス・アスペルガーとレオ・カナー』文芸社、2014、p.42-43)

⁵ H. Asperger, Die Autischen Psychopathen im Kindesalter, *Archiv für Psychiatrie und Nervenkrankheiten* 117, 1944, S76-136 (アスペルガー「小児期の自閉的精神病質」託摩武元/高木隆郎訳、高木隆郎/マイケル・ラター/エリック・ショプラー編『自閉症と発達障害研究の進歩』Vol. 4, 星和書店、2000、p30-68)

⁶ L. Wing, The relationship between Asperger's syndrome and Kanner's autism, Uta Frith ed., *Autism and Asperger syndrome*, Cambridge University Press, 1991(ローナ・ウィング「アスペルガー障害とカナーの古典的自閉症研究」富田真紀訳、ウタ・フリス編『自閉症とアスペルガー症候群』東京書籍、1996、p.184-186)

⁷ 相川翼『自閉症の哲学』共栄書房、2017、p.27

⁸ 石原孝二『精神障害を哲学する』東京大学出版会、2018、p.108

⁹ 同上、p109

て、発達の過程が付け加えられることになった」¹⁰と指摘している。また、DSM-5において自閉症は「自閉スペクトラム症/自閉スペクトラム障害」と表現されている通り、カナー型自閉症(知的な障害が比較的重い自閉症の病態)、アスペルガー症候群など様々な病態を同一のスペクトラムで捉える考え方が近年では主流になっている。今後の記述では自閉症と略記する。

2. 『自閉症の現象学』から

2.1. 『自閉症の現象学』の分析の方法

村上靖彦は『自閉症の現象学』において、彼自身の国立成育医療センターでの自閉症に関するフィールドワークの経験をもとに、現象学的手法を用いて自閉症を持つ人の経験構造の再構成を試みている。現象学とはフッサール以来、主に一人称視点で経験のあり方を明らかにする方法であり、客観的な視点を離れ、その世界経験のあり方それ自体を分析する方法である。それでは、定型発達の現象学者が自閉症を持つ人を分析することは、現象学的方法から考えれば不可能なことではないだろうか。しかしそうではないと村上は述べる。「自閉症児と出会ったときには、ある特定の感覚が生じる。すなわち、相手と私のふるまいの違いが、「差異の感覚」として直接経験される。この差異がまさにお互いの経験構造を照らし出

す。」¹¹このようにして客観的な計測やデータに頼らない自閉症を持つ人の経験構造の記述・分析が可能になる。また”差異”と言われているように、この自閉症を持つ人の経験構造の記述・分析は、定型発達者の経験構造のあり方を浮かび上がらせる。

2.2. 視線触発、図式化、現実

村上は自閉症を持つ人の経験構造を特徴づけるのは、「視線触発の不在・弱さ、図式化（次元間の浸透）の弱さ、現実の次元化の不在・弱さ」¹²であるとしている。それぞれの概念について見ていこう。

2.2.1. 視線触発

視線触発とは他者から向かってくる志向性を直観的に感じ取ることである¹³。目が合うという我々に馴染み深い現象を考えてみよう。誰かと目が合う場面において、我々はその誰かの眼球を知覚しているわけではない。眼球を注視した場合には、それは単なる眼球の形態の近くに成り下がり、目が合うことはない。つまりそれは知覚とは異なる次元で成立する現象であり、見間違いや統合失調症の誰かに見られているという妄想など眼球の知覚を伴わない視線の経験もありうる。また視線以外にも、スキンシップや呼びかけも含まれ

¹⁰ 石原孝二『精神障害を哲学する』東京大学出版会, 2018, p109

¹¹ 村上靖彦『自閉症の現象学』勁草書房, 2008, p.viii

¹² 同上, p.179

¹³ 内海健が指摘するように、自閉症を心の理論の障害と捉える考え方が支配的だが、我々は日常的な場面において心を推論によって捉えているわけではない。むしろ我々は心を直観している。心の理論のような、他者の心を推論する方法はむしろ、自閉症を持つひとが他者との関わりに入っていくかぎるを得ない際に採用する戦略に近い。(内海健『自閉症スペクトラムの精神病理 星をつぐ人たちのために』医学書院, 2015, p.19)

る。そこで起こっているのは誰かからの呼びかけがある特有の触発を引き起こしているということであり、村上はその特徴として以下の三つを挙げている。「視線触発は(1)こちらに向かってくる視線や呼び声・接触の直接的な体験であり、(2)感性的体験に浸透するが、それ自体は感性とは異なる次元で、(3)自我や他者の存在が認識されるに先立って作動している。」¹⁴ 自閉症を持つ人にはこの視線触発が欠けている、あるいは弱いのである。村上が非常に自閉度の高い子どもを前にすると視線はこちらを向いているのに目が合うとは感じられず、「自分が事物のように扱われている、と感じる」¹⁵と述べているように、自閉症を持つ子どもは目が合わないと言われるが、それはまさに視線触発の欠如を示している。また内海健は赤ん坊のひとみしりを、「まなざしによって自己が触発されるはじまり」¹⁶として特徴づけている。

2.2.2. 図式化

図式化とは、さまざまな異質な現象が浸透（相互に影響し合うこと）し合い、高次の秩序を形成する運動である。例を挙げて考えてみよう。我々は普段誰かと目が合った際にはその瞬間にどきっとし、なんらかの緊張感・反応が惹起される。この際に我々は相手の身体性を私の身体性における動揺などとして直接体験している。これを村上は視線触発により開かれた間身体性の次元におい

て、他者からの触発は「感情表現として体験される、つまり表情・身振りとして意味づけられる」¹⁷と述べる。この現象において働いているのが、「それ自体では知覚できない情動性や運動感覚といった諸次元が浸透し合いつつ、統一事象として身振りや表情として分節・現出する運動」¹⁸としての図式化の働きである。カントの図式論に関連した注における記述を参照すれば、「知覚以外の現象が知覚の次元と浸透し合うことで、知覚そのものも形象化するとともに、その異次元も分節するという、相互分節の働き」¹⁹ということを意図しているようである。つまりは、情動性や身体性などの直接は知覚できない次元が、知覚と浸透し合うことで、表情・身振りとして、つまり知覚自体が楽しそう、あるいは悲しそうといった意味を持つものとして現れるという現象が図式化のことであろう。そしてこの図式化の機能が自閉症を持つ人たちでは弱いと言われる。これは図式化を欠いた視線触発が恐ろしいものとして現れる視線恐怖という現象や、他人の感情が了解できないなどといったこととして見て取ることができる。またここで今後の議論のためにもさらに注目しておきたいのは、視線触発は、否応なく感情と運動を触発し、それを軸に多くの感情と運動が組織化するものとして、「情動性と運動感覚の「触発のきっかけ」と、「組織化の軸」の機能」²⁰を果たす、図式化を導くものとして考えられているというこ

¹⁴ 村上靖彦『自閉症の現象学』勁草書房, 2008, p.3

¹⁵ 同上, p.3

¹⁶ 内海健『自閉症スペクトラムの精神病理 星をつぐ人たちのために』医学書院, 2015, p.49

¹⁷ 村上靖彦『自閉症の現象学』勁草書房, 2008, p.18

¹⁸ 同上, p.20-21

¹⁹ 同上, 2008, p.208

²⁰ 同上, p.19

とである。

2.2.3. 現実

現実²¹とは、「了解・表象できない現象、対応もできない得体の知れない現象のこと」²²であり、定型発達の人においてはこのような了解不可能で予期不能な出来事が固有の次元を形成する。例を挙げれば、未来の予測が挙げられる。我々は未来の出来事についてあれやこれや予測を行う。しかし同時に、未来の予測を行う際に、我々は未来の本質的な予測不可能性を自覚している。さらに言えばまさにこの予測不可能性、還元不可能性でもって未来が未来たらしめられているとも言えるだろう。では定型発達の人がどのようにこのような了解不可能なものとしての現実を受け入れるかといえば、それは概念によってである。否定性などの概念を用いて「現実そのものを経験することなく外堀を埋めることで、間接的に現実を受容する」²³ということだ。この現実の次元化が自閉症を持つ人では弱い、あるいは全くできないとされる。これは、予測不可能な未来というものをうまく受容することができず、不測の事態が起きるとすぐにパニックになってしまうことや、常同

行動に閉じこもること、物体の裏側という知覚不可能なものを受容することができずに奥行きのない二次元的な絵を描くことなどに表れている。松本卓也はこれを、古代ギリシアの哲学者パルメニデスが「存在とはありてあるものである」と言ったことを踏まえて、「定型発達者は、「ある」と言われた段階で、それが「なくなる」可能性を想像してしまう」²⁴のに対して、自閉症を持つ人は「「ありてあるもの」だけが存在するパルメニデス的世界に生きている」²⁵と表現している。

2.3 発達の過程

それでは以上のように視線触発、図式化、現実の次元化の弱さとして特徴付けられた自閉症の人が、定型発達者においてはごく初期から自然と成立している経験構造を獲得していくのほどのようにしてなのだろうか。村上はその過程を、「感覚一元論の世界から出発して、視線触発に開かれ、身体感覚と情動性へと開かれてゆくのである。そして最後には不測の事態としての現実を受容する力を身につけ、論理構造を創設する」²⁶ようなものとしてまとめている。つまり、視線触発、図式化、現実の次元化の順に発達は起こってくるとい

²¹ 現実という概念の『自閉症の現象学』での用法はラカンの現実界の概念と近い。村上自身も「「現実(界) le réel」はラカンの用語として有名であるが、他の精神分析家やあるいはベルクソンやレヴィナスといったフランスの哲学者も使う。切迫した現象でありながら、それについては理解することも何かを表象したり予測したりすることもできないが、しかし私たちに取り憑いているのが現実である」(村上靖彦『自閉症の現象学』勁草書房, 2008, p.214)としている。

²² 村上靖彦『自閉症の現象学』勁草書房, 2008, p.58

²³ 同上, p.91

²⁴ 野尻英一, 高瀬堅吉, 松本卓也編著『<自閉症学>のすすめ: オーティズム・スタディーズの時代』ミネルヴァ書房, 2019, p.53

²⁵ 同上, p.53

²⁶ 村上靖彦『自閉症の現象学』勁草書房, 2008, p.197

うことである。ここで視線触発により引き起こされる経験構造の変容について補足しておく。

目が合わない、あるいは呼びかけても気づかないような自閉度の強い子どもの場合、つまり視線触発に開かれていない子どもの場合は、感覚的印象に共鳴するだけの他者のいない感覚一元論の世界を生きることになる。自身も自閉症を持つドナ・ウィリアムズの伝記には、完全な感覚一元論の世界に生きる自閉症を持つ子どもはその記述や振り返り自体困難であろうから全く同じではないにせよ、それに極めて近いと思われる経験が記述されている。「しばらくするとわたしは、自分が望むあらゆるものに一体化できるようになった—たとえば壁紙やじゅうたんの模様、何度も繰り返し響いてくる物音、自分のあごをたたいて出すうつろな音などに」²⁷。ここで重要なのが、このような感覚一元論の世界では他者を他者として直観していないというだけではなく、自己感覚もまだ立ち上がっていないということである。内海はこれをドゥルーズの「無人島」に関する論文を例に説明している²⁸。それはつまり、ある島が無人島でなくなるためにはそこに人が住めばすむわけではなく、他者によって構造化された経験世界を持つ人間が住むことによって初めて無人島でなくなるということである。我々の経験から考えられる他者のいない世界は、ひとりぼっちのいわゆる

孤独な世界であるだろうが、そのような経験はそもそも他者が経験構造として構造化されていて初めて可能である。視線触発に開かれていない自閉症者における他者のいない世界とは、他者に応答すべき自己も立ち上がらない、自他未分の世界である²⁹。そのため、それまで視線触発に開かれていなかった子どもが、目が合うようになるという場面では自己の立ち上がりが起こることになる。定型発達者では、その自己の立ち上がりがひとみしりとして現象するわけだが、内海はさらに、初めて他者に触発された際の痕跡を ϕ と名づけ、この ϕ が自己に先行するものとして、経験に先立ち経験を条件づける超越論的なものとして機能していることを指摘し、自閉症ではこの ϕ が未形成であるとしている³⁰。内海は、定型発達者においてひとみしりが始まる生後9ヶ月ごろにもたらされる変化を「9か月革命」と呼び、その過程を以下のようにまとめている。

- ① 自己は、他者から到来する志向性（視線触発）への応答として立ち上がる。その最初の兆候が「ひとみしり」であり、その際、乳児の中に、 ϕ という核がしるされる。
- ② ϕ は、以後、他者からの志向性をキャッチするセンサーとして機能する。 ϕ が励起され、自己の期限が反復されるたびごとに、自

²⁷ D. Williams, *Nobody Nowhere, The Extraordinary Autobiography of an Autistic*, Avon Books, 1993 (ドナ・ウィリアムズ『自閉症だったわたしへ』河野万里子訳, 新潮社, 2000, p.26)

²⁸ 内海健『自閉症スペクトラムの精神病理 星をつぐ人たちのために』医学書院, 2015, p.57

²⁹ 村上靖彦はこのような根本的な契機としての視線触発を発見した人物として、サルトルとレヴィナスを挙げている。さらに、サルトルは自他を対象として定立してしまったこと、レヴィナスは対人関係と倫理を同一視してしまったことが問題であると指摘している。(村上靖彦『自閉症の現象学』勁草書房, 2008, p.40)

³⁰ 村上靖彦『自閉症の現象学』勁草書房, 2008, p.53

己意識が刺激される。

③ 他者の思考性がわかるようになり、それを基軸として、それまではそのつどのパーツでしかなかった他者が、全体対象としてまとまりあがる。

④ φ は自己から環界を切り出す。それによって「ここ=私」という場所が拓かれる。φ は心的距離を与え、自己と対象を別の系として分離する。

⑤ 「ここ」を起点として、指さしが可能になる。それは「指示」という行為の基盤となる。

⑥ 指さしは、他者の注意を引き込み、共同注意という現象をもたらす。そのとき、横並びの関係が形成され、自己と他者の志向性が重ね合わされる。³¹

定型発達と自閉症の違いは、この過程が早くから自然と進んでいくか、どこかでこの過程が止まってしまう、あるいは意識的に後からこの過程を意識的に進めていかなくてはいけないという点に存在する。

3. 視線触発の役割

前章までの村上、内海の議論から読み取れることは、視線触発という現象が、発達の最も基礎的な段階、自他未分の世界からの他者とそれに応答するものとしての自己の立ち上げに関わるということである。また、図式化や現実の次元化といった機能も、視線触発が起こりそれによって方向づけられることで成立すると考えられている。視線

触発、図式化、現実の次元化という機能の程度は自閉症を持つ人の中でも当然異なるが、視線触発の全くない図式化などは考えられないことになろう。しかし、このような視線触発を第一次的なものとする自閉症の捉え方とは異なる見方も存在する。

3.1. まとめあげ機能がゆっくりであること・図式化概念再考

アスペルガー障害を持つ綾屋紗月は空腹感がわからないという興味深い現象を記述している³²。綾屋は胃のあたりがへこむ、胸がわさわさする、胸が締まる感じがするという身体感覚とそれに伴う、なんだか気持ちが悪い、無性にイライラする、悲しいといった心理感覚が充満し、そういった多くの情報が「空腹である」というまとまった形（綾屋はそれを<身体の自己紹介>と呼んでいる）へとまとめあがらないという現象を記述している。ここで綾屋が記述している現象は、村上の概念を用いれば、図式化の機能の弱さによって説明されるであろう。ここで村上の図式化概念は異なる次元間の浸透のしやすさに関するものであったが、綾屋の記述からはそれだけではないもの、ある次元の中でもまとめあがりにくさがあるように見受けられる。異なる次元間での浸透という点で見れば、上述したように、ある身体感覚と心理感覚がセットになって自らにおいて起こっている状態を綾屋自身が把握しているように、異次元間での浸透は起こっているようだ。それでもやはり空腹であることは把握されないのである。綾屋自身はこれを「大量の身体感覚を絞り込み、ある

³¹ 内海健『自閉症スペクトラムの精神病理 星をつぐ人たちのために』医学書院, 2015, p.79-80

³² 綾屋紗月, 熊谷晋一郎『発達障害当事者研究-ゆっくりしていねいになりたい』医学書院, 2008, p15

ひとつの<身体の自己紹介>をまとめあげるまで」の作業が、人よりゆっくりである」³³と説明しているが、ここで“まとめあげる”という表現において主眼に置かれているのは、異次元間での浸透の機能ではなく、ある次元の中での“解像度”の違いとでも表現されるような、身体感覚という次元の内部でのまとめあげる機能であろう。実際には、村上の言う異次元間での浸透とそれに伴う秩序化、綾屋の言う同じ次元のなかでのまとめあげの両方を含む、より広い“まとめあげ機能”が自閉症を持つ人では低下していると考え、その中でもヴァリエーションが存在すると考えた方が、より現象に沿うことができるようになるのかもしれない。内海は先述の<φ>の機能として、目の前に現れては消えていく数々の事象を「一点に収束させる「虚焦点」のようなものとして機能する」³⁴という経験を束ねる機能を考え、自閉症を持つ人ではこの機能が弱いために、定型発達者ではトップダウン型の情報処理を行うのに対し、ボトムアップ型の情報処理を行っていると記述しており、ここでも考えられているのは図式化よりも広いまとめ上げの機能であろう。

3.2 解像度を第一次的なものとする考え方

この綾屋の記述をもとに、共著者である熊谷晋一郎と哲学者の國分功一郎は対談の中で、世界の解像度の違い(まとめあげ機能の強弱による世界の見え方の違い)が自閉症の根本にあるのではないかと、という見方を提示している。熊谷の発言を

引用すれば、「視線触発を受け取ることができない原因は、他者と関わる以前から、解像度が違うからです。多くの人がモル的に見ている時に、自閉症者は分子的に見ている。もし、これを解像度の違いというふうに表現するとすれば「はじめに「解像度の違いありき」」³⁵ということになる。この順序の逆転、まとめあげ機能あるいは解像度の違いこそが基礎的であり、他者関係はその結果として生じるという主張は一定の説得力がある。特に綾屋など、高機能自閉症やアスペルガー障害を持った人の他者との関わり方の困難を説明するためには、視線触発の程度だけでは収まらない部分があるのは事実であろう。しかし、前述した自閉度の高い子どもを前にすると視線はこちらを向いているのに目が合うとは感じられず、事物のように扱われていると感じる³⁶という状況や「いかなる呼びかけにも反応しない」³⁷という事態は、解像度の違いを第一次的なものとして説明することはできないように思われる。最も自閉度の高いとされる子どもは解像度が極めて高い、あるいはまとめあげの機能が極めて低いために、他者と全く目が合わないという説明よりは、やはり、呼びかけられ、それに触発されることができないという視線触発の機能不全による説明の方が的を得ているのではないだろうか。視線触発という他者の志向性に触発されうるという可能性に開かれているのではなく、解像度、あるいはまとめあげる機能に問題があるのだとしたら、感性的印象に没頭し、それが起こりにくくなるのだとしても、重度

³³ 同上, p.23

³⁴ 内海健『自閉症スペクトラムの精神病理 星をつぐ人たちのために』医学書院, 2015, p.154

³⁵ 國分功一郎, 熊谷晋一郎『<責任>の生成-中動態と当事者研究』新曜社, 2020, p.217

³⁶ 村上靖彦『自閉症の現象学』勁草書房, 2008, p.3

³⁷ 同上, p.29

の自閉症の子どもにおいても他者からの志向性に気づいてしまう瞬間があってもおかしくないはずである。また、村上は「今まで他の人の存在に気づけなかった自閉症児にとって、人と目が合うようになる体験とは、感性的印象だけでできた次元の世界から、いままで全く存在しなかった次元が出現し、そこへと突入する経験であると言える」³⁸と述べ、それまで不成立であった視線触発が成立することにより劇的に経験構造が変化するという。それを示すのは、村上が取り上げている、フランスの精神分析家アルーシュがフェルディナンド少年と行った心理療法の記録に登場する出来事であろう。フェルディナンドは自閉度が高く、グループセラピーで簡単な運動・ダンスなどのセッションを行なっているにもかかわらず、「一緒にいるのかいないのかわからないような状態で、周りのメンバーを気にする風でもなかった」³⁹が、「自分の番を無視してセラピストが他の子どもに声をかけたときに、彼はかんしゃくをおこした」⁴⁰という。このセラピストに無視された際に

「フェルディナンドは初めて相手に向けて反応」⁴¹することとなった。そして「この事件をきっかけとして、フェルディナンドは周りの人を見るようになり、そしてアルーシュがフェルディナンドを見ているか気にするようになった」⁴²のである。このような初めて相手に気づく体験をきっかけにした対他関係の全体的な変容を解像度の違いによって説明することができるだろうか。解像度

の違いによって説明する場合、セラピストが自分の番を飛ばしたという場面において解像度、あるいはまとめあげる機能にとって何か重要な出来事が起こっていないとすることはならないだろうが、そのように説明することは難しく、またその後引き起こされる他者関係の全体的な変容はより理解しにくいものとなる。むしろこの場面では、自分の番が飛ばされるという普段とは異なる不快な経験がきっかけとなり、不在となったセラピストからの呼びかけに対する欲求のような形で、呼びかける者としてのセラピストの存在が気づかれたと考えるのが自然だろう。この視線触発の成立により、自他未分の世界が自己と他者に分節化され、より発展的な対他関係、つまりはアルーシュが自分を見ているか気にするといったことが可能になったのだろう。そのように考えると、発達の段階で、コミュニケーションの根本的な可能性を開くという意味において第一次的であるのは、やはり視線触発であって、視線触発に開かれた高機能自閉症やアスペルガー障害を持った人にとってはコミュニケーションの困難の所在は解像度の違いに存するのだとしても、熊谷・國分の立場を支持することはできない。

4. コミュニケーションにおける困難の所在のパリエーション

ここで、熊谷・國分の指摘が我々に与える重要な示唆は、一般に対人相互作用の障害、コミュニケーションの障害と言われるものには主に二つの

³⁸ 村上靖彦『自閉症の現象学』勁草書房, 2008, p.12

³⁹ 同上, p.31

⁴⁰ 同上, p.31

⁴¹ 同上, p.31

⁴² 同上, p.31

バリエーション、あるいは要素の組み合わせからなるのではないかということである。それはつまり、視線触発が弱い、あるいは不在であることによる問題と、図式化（あるいは広義まとめあげ機能）の弱さや現実の次元化の弱さ、あるいは不在による問題である。視線触発は他者とのなんらかの関係に入るための可能性の条件としても機能する、基礎的なものである。しかし、視線触発にある程度開かれ、他者から呼びかけられるということが可能となっても、それだけが困難さを形作るのではない。綾屋が記述したような事態、まとめあげ機能が定型発達者よりもゆっくりであるという事態は、そのような解像度が異なる関係においてコミュニケーションの不具合を引き起こすだろう。また村上によれば、現実の次元化は時間、空間の捉え方に加えて他者の考えの不可知性の受容にも関わるとされていた。時間が流れない、空間に奥行きがないという事態も、定型発達者の時間感覚や空間感覚との間で齟齬を生むであろうし、他者を他者としてうまく受容するためには、他者の考えは本質的に不可知であるということを受け入れた上で可能であろうから、このことによってコミュニケーションの問題が生じるのは理解できることである。実際、綾屋の抱えるコミュニケーションに関する困難さは図式化（あるいは広い意味でのまとめあげ機能）の違いによるものであろう。また視線触発によるものか、それ以外の機能によるものかという、コミュニケーションの二つの区分は我々に異なる対応を要求することになるだろう。まず、視線触発の未成立が問題となる場合は、密接的な関わり合いの中で視線触発に気づくように働きかけるような対応が求められるであろう。解像度、あるいはまとめあげ機能に問題がある場合は、言いたいことややりたいことがあ

る一つの形にまとめあがるまでが遅いということが考えられるので、急かさずに待つことや、開かれた質問ではなくて閉じられた質問を行うなどの対応が良いのかもしれない。

5. おわりに

本論文では村上靖彦『自閉症の現象学』における議論を概観し、その図式化概念を再考した。また視線触発が第一次的か否かに関して、村上靖彦・内海健と熊谷晋一郎・國分功一郎の立場のを取り上げた上で、村上・内海の視線触発の欠如が第一次的であるとする考え方がより説得力を持つとした。また、熊谷・國分の主張から導かれる重要な点として、コミュニケーションの困難には二つのヴァリエーションがあるということ指摘した。その上での具体的な対応についてはあくまで提示にとどめた。今後の課題としては、以上のように考えられたコミュニケーションの困難の所在の二つのヴァリエーションを、実際の臨床の場面でどのように見分けるのか、という点。そして具体的にどのような対応がそれぞれのヴァリエーションに対して適切であり、逆にどのような対応は避けなくてはならないかということをも明確化し理論化することが挙げられる。

文献

- M. Heidegger, *Sein und Zeit*, Niemeyer, Tübingen, 19.Aufl., 2006 (ハイデガー『存在と時間』熊野純彦訳, 岩波書店, 2013)
- 米国精神医学会『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル』日本精神神経学会監修, 高橋三郎・大野裕監訳, 医学書院, 2014
- E. Bleuler, *Die Prognose der Dementia praecox (Schizophreniegruppe)*, *Allgemeine Zeitschrift F*

- ür Psychiatrie Und Psychisch-Gerichtliche Medizin* 65 (ブロイラー『早発性痴呆または精神分裂病群』飯田真・下坂幸三・保坂秀夫・安永浩訳, 医学書院, 1974)
- L. Kanner, Autistic disturbances of affective contact, *Nervous Child* 2, 1943 (カナー「情動的接触の自閉症障害」成瀬毅編訳『自閉症論資料集の試み—ハンス・アスペルガーとレオ・カナー』文芸社, 2014)
- H. Asperger, Die Autischen Psychopathen im Kindesalter, *Archiv für Psychiatrie und Nervenkrankheiten* 117, 1944 (アスペルガー「小児期の自閉的精神病質」託摩武元/高木隆郎訳, 高木隆郎/マイケル・ラター/エリック・ショプラー編『自閉症と発達障害研究の進歩』Vol. 4, 星和書店, 2000)
- L. Wing, The relationship between Asperger's syndrome and Kanner's autism, Uta Frith ed., *Autism and Asperger syndrome*, Cambridge University Press, 1991(ローナ・ウィング「アスペルガー障害とカナーの古典的自閉症研究」富田真紀訳, ウタ・フリス編『自閉症とアスペルガー症候群』東京書籍, 1996)
- 相川翼『自閉症の哲学』共栄書房, 2017
- 石原孝二『精神障害を哲学する』東京大学出版会, 2018
- 村上靖彦『自閉症の現象学』勁草書房, 2008
- 内海健『自閉症スペクトラムの精神病理 星をつぐ人たちのために』医学書院
- 野尻英一, 高瀬堅吉, 松本卓也編著『<自閉症学>のすすめ: オートティズム・スタディーズの時代』ミネルヴァ書房, 2019
- D. Williams, *Nobody Nowhere, The Extraordinary Autobiography of an Autistic*, Avon Books, 1993 (ドナ・ウィリアムズ『自閉症だったわたしへ』河野万里子訳, 新潮社, 2000)
- 綾屋紗月, 熊谷晋一郎『発達障害当事者研究—ゆっくりていねいにつながりたい』医学書院, 2008
- 國分功一郎, 熊谷晋一郎『<責任>の生成—中動態と当事者研究』新曜社, 2020